

# 化物からポケモンへ —キャラクターとしての妖怪—

香川 雅信

## 1. キャラクターとしての「化物」

妖怪は口から口へと伝えられる民間伝承（あるいは口承文芸）のなかの存在である、というのが、民俗学者が妖怪というものに対して無意識のうちに抱いているイメージであろう。しかし、近世以降の妖怪について考える場合、そうしたイメージは必ずしも当てはまらない。なぜなら、印刷メディアの発達した近世において、妖怪はすでに視覚的な存在として「流通」していたからだ。

安永五年（一七七六）、喜多川歌麿の師として知られる狩野派の絵師・鳥山石燕によって描かれた妖怪絵本『画図百鬼夜行』が出版される。これは一頁（半丁）ごとに一種類の妖怪が描かれた、まさに「妖怪図鑑」というべき書物であった。この『画図百鬼夜行』の妖怪は、その名前と視覚的形象によつてのみ特徴づけられている。かつて妖怪たちが登場したのは、説話や伝説、怪談などの「物語」のなかにおいてであったが、『画図百

こうしたキャラクターとしての「化物」は、口頭伝承の世界に淵源を持つものではあったが、もはや伝統的な妖怪とはまったく質の異なる存在になつていた。そもそも妖怪とは、日常的な理解を超える怪異を説明するための「概念」であり、また災いの予兆など神靈からのメッセージを伝える「記号」であつた。いずれにしろそれは人間の「生」と切実にかかわる、リアリティの領域に属するものであつた。一方キャラクターとしての

『画図百鬼夜行』の妖怪たちは、もはやそうした「物語」から切り離されて、独立した「キャラクター」として存在している。そう、近世において、妖怪とはまさに「キャラクター」だったのである。『画図百鬼夜行』と同時代、一八世紀後半に知的な諧謔とナセンスな笑いを盛り込んで大人向けの読み物となつた黄表紙のなかにも、妖怪たちを主な登場人物とした作品が数多く存在する。黄表紙は絵を主体とした、現代でいえば漫画に近いものであるが、このなかに登場する妖怪たちはまぎれもなく現代的な意味での「キャラクター」にはかならない。見越入道、河童、ろくろ首、豆腐小僧など、黄表紙に登場する妖怪は、いずれも明確な視覚的特徴や性質を有し、ジャンル内での「お約束」を踏まえて行動する。例えば見越入道は、実際の伝承では「背丈が伸びる妖怪」なのだが、黄表紙のなかでは首の長い入道姿の妖怪として描かれ、しかも妖怪たちの棟梁として位置づけられている。このようなキャラクター化された妖怪を、近世の人々は「化物」と総称していた。

「化物」は、「生」の必要性から求められたものではなく、リテイの構築にかかわるものでもない。それはいわば「生」の余剰の部分、「遊び」の領域に属し、現実世界とは切り離されたファイクションの領域に属するものであった。

つまり、近世において、妖怪をファイクションとして楽しもうという新たな妖怪観が生まれたのである。それは、妖怪が人々のリアリティのなかに位置づけられている限りは、生まれえないものであった。妖怪観の根本的な転換が、近世、とりわけ一八世紀後半において起こっていたのだ。

## 2. 妖怪図鑑の誕生

妖怪図鑑である『画図百鬼夜行』が刊行された一八世紀後半は、博物学的思考、あるいは博物学的嗜好というべきものが都市の人々のあいだに横溢した時代であった。

自然界に存在するあらゆるものを命名し分類する博物学に相当する学問は、洋の東西を問わず存在するが、日本においては「本草学」と呼ばれていた学問がそれに当たる。本草学は、本来は薬になる自然物を判別するための実用的な学問であったが、しだいに自然界に存在するありとあらゆるものを持て出し、命名し、分類する博物学としての性格を帯びるようになつていった。さらに、一八世紀には八代将軍徳川吉宗、およびその政策を受け継いだ老中田沼意次による殖産興業政策のなかで、各地の特

産物の調査と産業化が推進され、本草学はまた「物産学」の様相を帯びていく。

そんななか、一八世紀後半に登場したのが平賀源内という特異な個性を持つた本草学者であった。源内は宝暦七年（一七五七）に、江戸は湯島で「薬品会」<sup>やくひんえ</sup>を開催する。これは本草学の対象であるさまざまな自然物や各地の産物を一堂に集めて陳列し、人々の観察に供するという、日本最初の博覧会ともいうべきイベントであった。この「薬品会」に象徴される「さまざまなものを集めて目に見える形で列举する」という思考あるいは嗜好の形態は、本草学という学問の内部にとどまらず、文化のあらゆる局面で見られるようになる。

例えば天明年間（一七八一～八九）の狂歌ブームの際に数多く刊行された狂歌絵本は、狂歌の題材となつたさまざまな自然物を周到な観察に基づいた細密な絵で描いており、一種の博物図譜としての性格を持つていた。さらに、「虫」「鳥」「魚」といったカタゴリーのうちに含まれるありとあらゆるものを列举し、一つの「集」にまとめようとするあり方自体が、博物学の思考／嗜好と重なり合うものであった。このほかにも、世間のさまざまなものを列举し順位づけした「見立番付」、役者評判記に擬してさまざまな「名物」を列举し格付けした「名物評判記」、「名所」の博物誌ともいべき「名所図会」など、「さまざまのものを集めて目に見える形で列举する」博物学的メディアが、いずれも一八世紀後半を画期として簇生している。こう

した博物学的思考／嗜好が都市の人々のあいだに広がつていったのは、現実に膨大な数のモノや情報が都市に集積されつつあり、それら大量の情報を処理していく必要性に駆り立てられたものであつたと考えられる。そして、『画図百鬼夜行』のような妖怪図鑑もまた、こうした一八世紀後半の博物学的思考／嗜好の所産であつたと見なすことができる。

しかし、博物学的思考／嗜好の対象になつたことによつて、妖怪は決定的な変質をこうむることになる。かつて、物語やなんらかの「意味」と不可分であつた妖怪たちは、いまや視覚的な特徴によつて弁別されるようになり、その本来のコンテクストや地域性などを捨象されて、同じ一つの平面の上に並置されるようになつたのだ。こうして妖怪は「語り」のなかの存在から視覚的な「キャラクター」へと変容していく。さらに「意味」の裏づけを失つた妖怪たちからはリアリティが失われ、むしろその視覚的形象の特性（恐怖や滑稽など、両義的な強い感情を呼び起こす）によつて、人間の娛樂の材料となつていつたのである。これが一八世紀後半にもたらされた、妖怪觀の一大転換であつた。

### 3. 化物からポケモンへ

こうして視覚的な「キャラクター」へと変貌した妖怪たちは、人間の娛樂の材料として草双紙や玩具、大衆芸能などのなかで

跳梁することになる。とりわけ「妖怪玩具」の中には、「化物づくり」のおもちゃ絵や絵双六、カルタなど、さまざまな化物キヤラクターを一つの平面上に配置したものが多く見られる。これらは博物学的思考／嗜好がそのまま娛樂に直結したものであるといえるだろう。

こうした「妖怪玩具」に見られる「化物」は、まさに現代における「ポケットモンスター（ポケモン）」そのものである。「ポケットモンスター」は、ポケットモンスター（ポケモン）と呼ばれる多種多様な形態を持つた生物を、架空の世界を冒險しながら集めていくというゲームであるが、このゲームの最終目的は、完全な「ポケモン図鑑」を作り上げることにある。つまり博物学的思考／嗜好が、このゲームの根幹を形づくっているのである。いわば「ポケットモンスター」は、江戸時代の妖怪図鑑や妖怪双六、妖怪カルタ、「化物づくり絵」の正統な後継者なのである。

しかし、江戸時代の妖怪図鑑や「化物づくり絵」と現代の「ポケットモンスター」のあいだには、もう一つ大きな転換が起こつている。それは、「ポケットモンスター」をはじめとして、現代の妖怪キヤラクターは「かわいい」ものになつてゐるということである。江戸時代の「化物」はもつぱら醜く不恰好に描かれており、滑稽な存在ではあつても、決して「かわいい」存在ではなかつた。しかし、現代の妖怪キヤラクターは、同じく異形の存在でありながらも、その形状は単純化され、丸みを帯び

たものとなり、不気味さを感じさせないようになつてゐる。それは、現代の妖怪キャラクターが感情移入の対象となつてゐるためであり、江戸時代の人々にはない新たな妖怪との接し方であるといえる。

畏怖するにしろ、笑い飛ばすにしろ、かつて妖怪は人間とは根本的に異質なものとしてある一定の距離を置かれていた。これに対し、現代はむしろ人間、というより「私」自身のうちに妖怪を取り込もうとしていることを見ることができます。オカルトブームなどに見られるように、現実の閉塞感が、非現実の世界にプラスの価値を与えるようになつてゐる状況を、こうした現象は反映しているのかもしれない。

(かがわ・まさのぶ／兵庫県立歴史博物館)

シンポジウム／怪異・妖怪の世界

## 豚妖怪の伝承と伝播

田畠 千秋

### 1. はじめに

奄美、沖縄諸島では、豚、牛、山羊、馬など家畜の妖怪が夜の世界を跋扈してゐる。なかでも豚の妖怪は、耳切れ豚、首切れ豚、地まわり子豚、物を言う豚、杓子に化ける豚、人間に化ける白豚など種類も多い。

また、「豚の神は偉いので、悪いモノに会つた時は、豚を起こして鳴かせろ」などというのは、鶏鳴ならぬ豚鳴で厄災を祓う呪術である。豚に関する俗信も数多い。

ここでは、「美女に化ける豚」の口承説話としての伝承をはぐくむ背景を、奄美、沖縄の民俗生活（豚便所）の中に見いだし、また、その伝播の起源を古代中国（『搜神記』八巻本）にもとめ、時空間を大きく越えた口承文芸の伝承伝播の一例の提示としたい。

### 2. 美女に化ける豚